

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

《理工農系》

●静岡大学情報学研究科情報学専攻

「マニフェストに基づく実践的IT人材の育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本GP事業の各年度ごとの教育効果・成果を速やかに外部からの視点で検証し、翌年度の事業実施に生かすためのアドバイザリー会議制度を構築した。アドバイザリー委員には、静岡大学情報学部客員教授陣を活用し、企業・社会に活躍する有識者、約20名を集めた。毎年の大学院GPフォーラムにて、新入生合宿研修、学生主体活動、国内外インターンシップの評価を、毎年の修士研究発表会にて、修士研究のレベル、修士教育・研究の方向性を評価した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

毎年度の2月下旬に開催される修士研究最終発表会に2日間にわたって、アドバイザリー委員に参加してもらい、じかに学生と委員との間の質疑応答を行い、終了後、「修士研究のレベル」「修士教育・研究の方向性」に関するアドバイザリー委員と研究科教員との意見交換を行った。それを踏まえて毎年度「評価」をまとめ、研究科委員会で紹介するとともに、翌年度のGP事業の進め方、学生の指導の指針とした。また、博士課程学生に対しては、個別にアドバイザリー委員からアドバイスをもらった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本GP事業についての外部の目からの評価で、翌年度の事業の進め方の参考になったことはもちろんである。それ以上に、修士研究最終発表会に、日本で有数の研究者であるアドバイザリー委員に加わってもらったため、学生（時には指導教員も）と委員との間で、研究方法、成果について真剣勝負のような討議を行うことができ、その年度の修士研究だけではなく、翌年度以降の修士研究のレベルを高めることができた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《理工農系》

●静岡大学情報学研究科情報学専攻

「マニフェストに基づく実践的IT人材の育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

学生の自己マニフェストを実現するために、特に「研究力」「キャリアデザイン力」「国際適応力」の育成をめざして、「国内外インターンシップ」を実施した。毎年度10～15名を、国外の大学・企業へは約1～2か月間、国内の大学・企業へは約2週間派遣した。大学の場合には、研究・学習を派遣先の教員・学生と協働して実施、企業の場合には実際の企業実務（開発を含む）を体験した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターンシップの実施のために、本研究科大学院GPを実施するWGの下に、情報学部キャリア支援室と協働した特別なインターンシップSWGを置いた。このSWGには、国内外の大学・企業との連携に豊富な経験をもつ教員を集めた。インターンシップ期間は短期間であったので、インターンシップ先との事前の交渉を行って、インターンシップ派遣学生が、できるだけスムーズに研究・企業のインターンシップが行えるように準備を整えた。また、インターンシップの募集にあたっては、応募学生がどのように自己マニフェストに、インターンシップという経験を位置付けようとしているかを重視して選考した。インターンシップ前には研修会、後には報告書提出・報告会で発表をさせ、成果の獲得と次年度への他学生への広報を徹底させた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

インターンシップを経験した学生はいずれも、得難い経験をし、「研究力」「キャリアデザイン力」「国際適応力」が磨かれたと報告書・報告会にて報告している。特に、海外で研修を行った学生は、「国際適応力」とともに、受け入れ先教員と共著論文を发表或、企業業務の改善提案を行うほどの成果をあげた。修了生へのアンケート調査結果では、回答者(50名)の40%の学生が「国内外インターンシップ」制度を今度も続けるべきであると回答し、実施事業のうちで最も高い評価を受けた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

④その他

《理工農系》

●静岡大学情報学研究科情報学専攻

「マニフェストに基づく実践的IT人材の育成」の事例

〈学生の自己マニフェストによる学習・研究・キャリアデザインの
動機付け〉

(具体的に何を実施したのか)

「基礎学力」「研究力」「キャリアデザイン力」「組織運営力」「国際適応力」を備えた「スーパー五力人材(博士課程)・五力人材(修士課程)」を育成するために、研究科マニフェスト(研究科から学生への約束)とともに、学生自身に自己マニフェストを書かせ、それを研究科在学期間だけでなく、修了後のキャリアデザインの目標にするようにした。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

自己マニフェスト作成にあたって、新入学時点で1泊2日の「新入生合宿研修」を大学外施設で行い、研究科の人材育成目標、研究科マニフェスト、キャリアデザインに関する講演を実施するとともに、新入生時点での自己マニフェストを学生自身に作成させた。その後、学生には自己マニフェストを研究室などに掲示して、日々、マニフェストの志を新たにするように指導した。さらに指導教員を通じて自己マニフェストの見直しをアドバイスし、国内外インターンシップ、JRA(修士課程学生=ジュニアリサーチアシスタント)・RA募集の際の必要書類とした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

修士課程入学時に自己マニフェストを書くことによって、キャリアの目標を定め、どのように勉学・研究を進め、「国内外インターンシップ」「学生主体活動」などにどのように参加して能力を身につければ良いか明確な指針にできた。修士課程修了時点のアンケートによると、60%の学生が自己マニフェストを「よく実現できた」、「まあまあ実現できた」、50%超の学生が「役に立つ」「まあまあ役に立つ」と回答し、教育の手段としての自己マニフェストの有用性が確かめられた。